莫言と魯迅：批判精神の継承と変容
—「狂人日記」と『酒国』、「阿Q正伝」と『白檀の刑』との比較を中心に—

Mo Yan and Lu Xun: Inheritance and Transformation of the Critical Spirit: Focusing on the comparison between “A Madman’s Diary” and “The Republic of Wine”, “The True Story of Ah Q” and “Sandalwood Death”

谷　金榜
Gu，Jin bang

摘要

Mo Yan loved reading Lu Xun since he was a boy, and after becoming an established writer, he repeatedly mentioned the influence he received from Lu Xun in his lecture. Lin Min jie summarizes that one of the characteristics of Mo Yan’s literature is that "I advocate the philosophy of performing true artistic expressions against the real world, and I am aware that I am a successor to the tradition of Lu Xun literature." Shozo FUJII claims that the 'strategy of national criticism' that symbolizes the bad side of Chinese society, where Lu Xun's 'A Madman’s Diary' is expressed, appears in the 'The Republic of Wine' of Mo Yan. I agree with FUJII's interpretation, but I would like to consider not only 'national sexuality criticism' but also how Mo Yan inherited Lu Xun's critical spirit and developed it in social criticism and political criticism. And about ‘The True Story of Ah Q’ and ‘Sandalwood Death’, the author wants to compare and analyze not only the criticism of national character but also the clown of Ah Q and Zhao Jia as a clown based on social criticism and political criticism. In addition, as for the attitude and motive of literary creation in Lu Xun and Mo Yan, the difference between Lu Xun, who takes the attitude of "for the people" as an enlightenment, and Mo Yan, who takes the attitude as a member of the people, will be examined at the end of the paper.

キーワード：*莫言　魯迅　社会批判　「民衆のために」　「民衆として」*
Keywords: Mo Yan　Lu Xun　social criticism　"for the people"　" a member of the people "

1. はじめに

魯迅（1881－1936）は「中国現代文学の父」とも称される文学者であり、中国現代文学に大きな影響を与えた文学者の一人でもある。莫言は少年時代から魯迅を愛読しており、既成作家になった後、その講演の中で魯迅から受けた影響に繰り返して言及している。林敏潔は、莫言

文学の特質の一つとして、莫言が「現実社会に対し真実の芸術的表現を行うという文学理念を提唱し、魯迅文学の伝統継承者たらんと自覚している」とまとめており、「莫言は自己の創作を 1919 年の五四運動以来の魯迅、巴金らの作家が切り拓いた社会人生の真実を表現するという創作伝統の中において、中国知識人の良知と勇気を示している」[1]と述べている。藤井省三は、莫言の魯迅に関する読書体験から、「「薬」と「狂人日記」とは『酒国』に影響しています」という言葉を紹介しており、「中国社会の悪しき側面を食人行為に象徴させる――魯迅が「狂人日記」で採用したこの国民性批判の戦略を、莫言は『酒国』において継承したのではあるまいか」[2]と指摘している。

筆者は「中国社会の悪しき側面を食人行為に象徴させる」という「国民性批判の戦略」が『酒国』に現れているという藤井省三の解釈に賛成した上で、国民性批判だけでなく、社会批判・政治批判の上で莫言がどのように魯迅の批判精神を継承したのか、発展させたのかを検討したい。「阿Q正伝」と『白檀の刑』について、筆者は国民性批判だけにとどまらず、首切り役人の心理を社会批判・政治批判という側面から比較分析したい。また、魯迅と莫言における文学創作の態度や動機については、啓蒙者として「民衆のために」という姿勢をとる魯迅と、民衆の中の一員としての姿勢をとる莫言との相違点を論文の最後に検討する。

2.「狂人日記」と『酒国』: 国民性批判から社会批判・政治批判へ

2.1「吃人」の主題に対する文学的理解

張閎(2000)は「莫言は五四新文学の批判性の伝統を継承し、さらに新たな特徴を賦与した。「吃人」は、魯迅においては民族の伝統文化に関する批判性という主題であったとすれば、莫言においては主に人間性と現実の政治性に関する批判性という主題である」[3]と述べている。張論文は主に「人間性」、「性」(sex)、言語と会話の「政治性」について論じたが、「現実の政治性」の批判性に関する論述を展開していない。また、魯迅が批判したのは「民族の伝統文化」の全てではなく、伝統文化の悪しき部分だけであったと思われる。

羅興萍(2002)は「莫言が魯迅の国民性批判という思想を継承したというのは、魯迅の「吃人」の主題を継承したのである」「作者が用いたこのような感性的な文章は、食人者の残酷な本性を掲示し、国民の愚弱さをも批判し、魯迅が表した「吃人」の主題の現代版だと言ってもよいだろう」[4]と述べている。「国民性批判」や「吃人」の主題への継承において、筆者は羅興萍とは同じ見解を持っているが、莫言が国民性への批判だけにとどまっていない。『酒国』は、虚構の酒国を以て現実の中国を揶揄し、社会批判・政治批判の面における魯迅の批判精神を受容していると思われる。これについては後述する。

張磊(2002)は「前者(「狂人日記」、筆者注)は「国民性」の改造を求めて、健全な国民の性格を打ち立てることを期したが、後者(『酒国』、筆者注)は社会政治の現実を転化すること

に重点を置いて、健全かつ合理的な社会体制を打ち立てることを期する。前者は人間に着目するが、後者は社会に着目する。前者は人間の現代化を追求するが、後者は社会の現代化を重視する」[5]と述べている。

この３人の研究に対して、筆者の見解は、特に張磊に近いが、ほかの２人の研究からも多くの示唆を受けている。魯迅は国民性の批判や国民性の改造に着目するだけでなく、社会批判ひいては社会の改造にも触れており、「健全かつ合理的な社会体制を打ち立てることを期」していたであろう。莫言は魯迅のように人に着目して国民性の改造を提唱していないが、国民性の欠点・弱点を「種の退化」にして、「健全な国民性格を打ち立てることを期」していた。つまり、国民性批判、社会批判などは魯迅文学、莫言文学が共有する文学のテーマであり、いずれも「吃人」の主題によって表現されている。

中国現代文学上の「吃人」の主題は魯迅の短編小説「狂人日記」（1918）に由来する。小説では以下のように述べている。

> 人が昔からしばしば人を食ってきたことは、僕も覚えてはいるものの、ちょっとあいまいだ。歴史を繙（ひもと）いて調べてみると、この歴史には年代はなく、どのページにもグニャグニャと「仁義道徳」などと書いてある。どうせ眠れないのだから、夜中まで細かく読んでいると、字の間から見えてきた字とは、本の端から端まで書かれている「吃人」の二文字だった！［藤井省三訳］[6]

ここでは、「この歴史には年代」がないため、過去・現在・未来という三つの時空が包摂されており、魯迅は中国社会における「吃人」の伝統性、現実性、将来性を提示している。したがって、「狂人日記」における「吃人」の主題はいわゆる封建礼教の「吃人」、封建家父長制の「吃人」を指すだけでなく、将来も比喩的に「人を食っていく」に違いないという中国社会の本質を「吃人」という二文字でまとめている。魯迅時代の中国と現代中国社会の諸相と比較してみると、魯迅の中国社会への洞察力やその思想の先見性がわかる。魯迅には「人」に着目し、国民性の改造を求めるが、その手段が国民性批判と社会批判であり、その最終の目標が社会改造であることと考えられる。

そして、『酒国』（1993）には、そのメタ小説的な要素として、「莫言先生」に私淑して作家を目指している李一斗という人物と、莫言との往復書簡が挿入されている。その文面において、李は魯迅の「狂人日記」に言及して、以下のように書いている。

> 先生、私は昨晩もうひとつ『肉童』という小説を書きました。この小説で、私は魯迅の筆法を比較的円熟した手法で応用できたと思います。つまり手に握った筆を鋭利なあいくちと変え、華麗なる精神文明の皮をはぎ取り、残酷な道徳、その野蛮な実体を暴き出したのです。私

のこの小説は「厳格現実主義」の範疇に属します。（中略）私の主旨はわが酒国の腹の出っ張った汚職役人どもを痛烈に攻撃することであり、この小説は必ずや「暗黒王国のひと筋の光明」となり、新時代の『狂人日記』となることでしょう。［藤井省三訳］[7]

この部分について、張旭東（2014）は「李一斗の作品はさながら現代文学史、とりわけ流派やタイトルの歴史を提示するのだが、それが真面目な文学史ではなく、荒唐無稽な方法で書かれているために、こうした文体そのものが何か荒唐無稽なものに思えてくる」「李一斗は自分のタイトルにたえず命名する。そればかりか、彼が目にする現実や、自分自身に対してさえも命名し続ける」[8]と評している。張旭東は、李一斗が語りの「道具」とする役、その作品が「荒唐無稽」であることを指摘したが、莫言や『酒国』に触れていない。「肉童」は李一斗が「莫言先生」に送った創作であり、酒国市で幹部連中に「肉童料理」を提供するため、特別調達所が男の赤ちゃんをその親から購入することを描くものである。李一斗と莫言とを創作共同体としてみると、莫言における「手に握った筆を鋭利なあいくち」にして、「残酷な道徳、その野蛮な実体」などの現代中国の暗黒面を暴き出すことは魯迅文学が取り扱った課題であり、魯迅から継承してきたのではないだろうか。「新時代の『狂人日記』となる」ものは個体の「肉童」ではなく、本体の『酒国』であろう。「吃人」の主題を魯迅から莫言への継承はこのように解釈すれば、容易に理解できる。

以上、魯迅と莫言は「吃人」に対する理解とその文学的表現がそれぞれ、完全に一致していない。「狂人」が調べた「歴史」は文化の範疇に属し、封建礼教や「仁義道徳」などと同じく、中国伝統文化の一部分である。したがって、魯迅は文学を通して、特に中国伝統文化における「吃人」の現象、「吃人」の思想、「吃人」の文化を捉えて表現したと考えられる。それに対して、莫言は魯迅が提起した「吃人」の主題を書き続けたが、官僚の腐敗や汚職、社会道徳の喪失、ひいては政治体制の問題に批判の筆を執った。つまり、莫言は「汚職役人どもを痛烈に攻撃する」というように、現代中国の社会現状に立脚し、その「暗黒王国」の悪しき側面を「吃人」に象徴させ、人に着目し、社会制度や政治制度に着目していると考えられる。

2.2「吃人」の主題における批判の展開

「歴史」を調べた狂人は中国社会や中国文化における「吃人」の一面を発見し、さらに周りの人々が「吃人」に参与することに注意を払った。このような「吃人」に対して、狂人は「やはり昔からの習慣なので、悪いこととは思わないのか？それとも良心を失い、悪いと知りつつ食べているのだろうか」[9]というような疑問を抱えている。更に、「君たちだって改められる、心の底から改めるんだ！やがて人食いの人は許されなくなる、この世で生きていけなくなるということがわからないのか」[10]と人々を勧告した狂人は人食いをする、人食いをされるとい

うようなことを繰り返してきた中国社会の真実を見つけるようになった。「狂人日記」の最後に、以下のように述べている。

> 四千年来常に人食いをしてきた土地、今日初めてわかった、僕もここに長年暮らしており、大兄さんが家督を継いだあとに、ちょうど妹が死んだのだから、大兄さんはご飯のおかずに、こっそり僕たちに食べさせていたかもしれないのだ。
>
> 僕の知らぬまに、妹の肉を数切れ食べていたかもしれず、今では僕自身の番となったのだ……
>
> 四千年の人食いの履歴を持つ僕、最初は知らなかったが、今こそわかった、本当の人に顔向けできない！[11]

ここでは、「家督を継いだ」ことから、封建礼教や封建家父長制への批判を容易に理解できるが、根本的には伝統文化の中の「吃人」の思想や文化を批判の的とするのではないだろうか。「四千年来常に人食いをしてきた土地」というのは中国社会で、これからも「人食いをしていく」のがその真実である。「四千年の人食いの履歴を持つ僕」という者は四千年の人食いの歴史や文化を持つ代表者であり、人食いをしない「本当の人」はいない。中国社会の現状に失望し、中国社会に未来が見えない魯迅は「狂人日記」の最後で「子供を救って」という叫び声を出して、確かに啓蒙者の姿勢にしている。魯迅は「灯下漫筆」（1925）の中で「吃人」の主題を再び提起し、中国の文明[12]への批判を行った。

> かくて、大小無数の人肉の宴席が、文明はじまってこのかた、綿々と今日までつづいている。その席で人は、他人を食い、自分は他人に食われる。おろかな殺人鬼の歓声によって、いたわしい弱者の泣き声はかき消されてしまう。女こどもは言わずもがなだ。
>
> この人肉の宴席は、今でもつづいているし、今後もつづけるつもりの連中がたくさんいる。この人食いの一味を追いはらい、この宴席をひっくり返し、この厨房をたたきつぶすこと、それが今日の青年の使命である。［竹内好訳］[13]

「大小無数の人肉の宴席が、文明はじまってこのかた、綿々と今日までつづいている」というのは「狂人日記」における「昔からの習慣」「四千年以来常に人食いをする土地」という表現とはほぼ一致しており、中国社会における「吃人」の文化・思想を批判している。そして、ここでは、魯迅が「狂人日記」の中で提示した中国社会における「吃人」の伝統性、現実性、将来性は再び現れている。「狂人日記」の中で、「僕」「大兄さん」「妹」は具体的な人間でなく、「大兄さん」が「吃人者」を代表し、「妹」が「被吃者」を代表し、「僕」がその「吃人」社会の真実を発見した「発見者」である。「発見者」・狂人は迫害狂という病みで自分が「吃人者」

の一員ということを悟ったが、のち、「すでに快復して某地に行き任官待ちなり」[14]ということであるため、堂々と「吃人」の社会に戻った。

ところで、『酒国』では、「吃人」「人肉の宴席」を象徴するものは莫言の筆遣いで再び表現している。李一斗が「莫言先生」に送った手紙の中で、以下のように書いている。

> 酒国市の一部の腐敗は行くところまで行っており、良心のかけらもなくなった幹部が赤ちゃんを煮て食うというのは全く事実でして、現在調査が進んでいるとのこと、この事件がいったん明るみに出るや、必ずや世界を震撼させることでしょう。
>
> ここの一部のデタラメ官僚は腐敗しきっており、敢えて世界のタブーを冒し、男児を殺して食べているのです。この話は私の老岳母（元調理学院助教授、特殊食料栽培研究センター主任）が語ったことです。彼女の話ではわが酒国市郊外には専門に肉童を生産する村があり、村人はこのことを当たり前と考えており、育てた小豚を売るように肉童を売っても驚天動地の悲しみを感じるわけでもないのです。[15]

李一斗もその老岳母も狂人と同じく、発狂の状態を持っており、「吃人」社会の真実を発見した「発見者」である。とくに、李一斗は快復した狂人と同じく、結局、彼が酒国市宣伝部に入り、かつて批判した腐敗官僚、「肉童料理」を食う幹部連中と同調するようになった。ここで、莫言は李一斗とその老岳母の口振りを通して、魯迅が表象化した「吃人」の主題を表現しているが、現代中国における具体的な官僚の腐敗、汚職などの社会現象を指しているため、その批判は現実的な意味を有している。それに対して、四千年の伝統文化の「吃人」をめぐる魯迅の批判は国民性の改造、社会改造を目標とするため、社会的な意味を有している。一方で、莫言の批判は社会批判・政治批判であるため、現代中国の現状や社会現象に立脚しており、社会改造を目標とするより、社会改革・社会改良を目標とするのが妥当であろう。莫言は『酒国』について「私の文学経験」（2007）の中で、以下のように語っている。

> この小説は 1990 年代の役人腐敗現象に対する批判が最も強い小説でして、国内の多くの評論家が縮みあがって評論執筆の度胸をなくしてしまったのは、この小説の筆鋒があまりに鋭いため、多くの話が彼らには明白に話せなかったからです。この小説中の多くのブロットは一見して、大変荒唐無稽ではありますが、荒唐無稽の中に非常に真に迫る現実が隠されているのです。[16]

社会改造は魯迅を代表とする五四以降の知識人の理想や目標であるが、莫言にとっては現有の社会体制下、暗黒な社会の側面、不平等な社会現象を指摘し、社会改革・社会改良を求めている。具体的には、莫言は魯迅が表象化した「吃人」の主題を具象化して、「役人腐敗現象

に対する批判」を通して、「荒唐無稽の中に非常に真に迫る現実」を隠している。『酒国』の中で、女性運転手と余一尺を銃殺した丁鈎兒は酩酊状態で、「肉童料理」を食う腐敗の幹部とその連中たちが見えたようだが、それは彼が自分の最期を迎える直前であった。

> 遊覧船が近づくと、船上の人物たちは目鼻も判別でき、口臭まで臭うほど。その中には丁鈎兒の良く知った顔が幾つもあった。金剛鑽、女性運転手、余一尺、王局長、李書記……自分自身に良く似た顔さえある。彼の親友も恋人も宿敵もみなこの食人の宴席に加わっているようだ。なぜ食人の宴席というのか？それは最後の料理の変わりなく金メッキした大皿の上では、ギラギラと油を流し芳しい香を発して、顔には人の心を迷わす微笑を浮かべた、あのふっくらとした男の子が端座していたからだ。[17]

莫言の描写は虚実混交した雰囲気を醸し出し、丁鈎兒の酩酊状態を通して、「吃人」の主題を再び表現している。酩酊した丁鈎兒は迫害狂の狂人、李一斗とその老岳母と同じく、精神状態に異常を来たし、「吃人」社会の真実を発見するようになった。莫言は現有の社会体制が芽生えた官僚の腐敗現象を批判し、それを「食人の宴席」に象徴させており、「最後の料理の変わりなく」「肉童料理」という描写によって、「吃人」の伝統性と継続性を暗に提示している。また、腐敗官僚とその連中のなかで、「良く知った顔が幾つもあった」「自分自身に良く似た顔さえある」ため、現代中国では、誰もが「吃人者」になる可能性があることや、腐敗官僚とその連中に同調する可能性があることを提示している。丁鈎兒が最後に露天の肥溜めに落ちてしまったことから、特捜調査は「肉童料理」の案件を解決することが出来なかった。官僚の腐敗問題が暴かれなかった結末は、現代中国における「吃人」の将来を提示している。

一方で、莫言は魯迅の国民批判からヒントを受けたが、魯迅が批判した傍観者ではなく、首切り役人を対象として社会批判を展開している。この部分は「阿Q正伝」と『白檀の刑』を取り上げて分析する。

3.「阿Q正伝」と『白檀の刑』:「奴隷根性」から「首切り役人の心理」へ

3.1 小丑・「小醜」としての阿Qと傍観者

魯迅は「ロシア語訳『阿Q正伝』序および著者自序略伝」(1925) の中で、「阿Q正伝」の創作意図について以下のように語っている。

> (前略) 一般人民は、まるで岩にひしがれた草のように、黙々と生き、そして黄ばみ、枯れてゆくばかり。この状態がすでに四千年つづいている。
>
> このような沈黙した国民の魂を描くのは、中国ではじつに困難である。(中略) それゆえ私

も、自分の感覚を元にして、単独で、わが眼底を通過した中国の人生として、これらを書くほかに方法がなかったのである。［竹内好訳］[18]

魯迅の「一般人民」「沈黙した国民」への関心は、その作品中に貫かれている。ここでは、「四千年」という歴史の時空概念が再び出現し、魯迅は「草のように、黙々と生き、そして黄ばみ、枯れてゆくばかり」という国民性の悪しき側面が中国人の心の中に根差している、と提示している。「吃人」社会の暗黒さ、民衆の愚昧への批判から見れば、「阿Q正伝」は「狂人日記」の姉妹編であり、「眼底を通過した中国の人生」を描く一試作である。それは阿Qというキャラクターによって表現されている。「阿Q正伝」については、中国のCNKIでは714件、日本のCiNiiでは59件の文章がヒットする通り、作家論、比較文学、テキスト分析など多様な方法による膨大な研究の蓄積がある。本論の趣旨と紙幅の関係からそれらの紹介を省くが、同作と莫言作品に関する最近の論文として嶋田聡「莫言『赤い高粱』試論–魯迅「阿Q正伝」、老舎『駱駝祥子』との比較から見た語りの特質（1）」、同（2）（『長野大学紀要』第40巻第2号、2018年及び3号、2019年）がある。（2）は、「民衆の中へ」、「民衆のために」という指向性をそれぞれ持つ魯迅「阿Q正伝」と老舎『駱駝祥子』に対して、莫言が目指す「庶民として書く」とはどういうことか、『赤い高粱』を対象として分析している。大野陽介は、「魯迅はこうした伝統演劇(類型化された「臉譜」、衣装や小道具などによって表現される中国伝統演劇を指す。筆者注)にみられる類型化された登場人物の形象を用いて「国民性」の体現できる阿Qを表現しようとした」と述べて、「物語の序盤を読んだ読者はやはりここで、阿Qを伝統演劇の丑としてイメージするかもしれない」[19]と指摘している。筆者は大野の論述に賛成する。伝統演劇の「丑（道化役）」という役柄には、冠をつけて滑稽劇を演じる方巾丑と冠をつけない小丑という二種類があるが、これに例えれば、阿Qは後者に属しているだろう。阿Qは小丑のように冠も無く、滑稽劇を演じており、読者や観衆に笑わせるからである。以下、阿Qとヒゲの王とのシラミ取りの競争を見てみよう。

阿Qは最初はがっかりしていたが、そのうちに怒り始めた。とても見られたものではないヒゲの王(ワン)でさえあんなに多いというのに、自分のはこんなに少ない、これはなんという大失態か！彼はぜひとも二、三匹大きいのを捕まえたかったが、どうしても見あたらない、やっと捕まえたのは中くらいで、此奴(こいつ)め、と厚い唇の中に押し込み、思い切り咬(か)んだところ、ピチッと鳴るだけ、またもやヒゲの王(ワン)の音には及ばない。［藤井省三訳］[20]

阿Qは常に人に軽んじられるが、趙旦那にビンタを食らった後、精神勝利法によって「今の世の中、間違っとるよ、息子がオヤジを殴るんだ」と思いながら、「自分でも次第に得意になってきた」[21]。こうして、阿Qは更に、自分と同じ身分の人、あるいは自分より身分の低い人

を軽んじている。したがって、シラミ取りというような極めて低俗なことに対しても、負けたら、「これはなんという大失態か」と気が済まない阿Ｑはそのような屈辱的な事件に、怒りに燃えたが、ヒゲの王に喧嘩を売り、殴られた。ここでは、阿Ｑはまるで小丑のように、相手のヒゲの王とともに、滑稽劇を演じており、観衆や読者に笑わせる。阿Ｑは「にせ毛唐」に悪口を言ってしまい、漆塗りのステッキで殴られたことを第二の屈辱的な事件にするが、屈辱や敗北がもらした不満を転嫁するために、若い尼さんをからかうことにした。小説の中で、その場で見物する傍観者および一時的に満足感を得た阿Ｑについて、以下のように述べている。

「和尚のお手付き、俺では手は付けられんのか？」彼は女の頬をギュッとつねった。

酒屋の客はみんなして大笑い。阿Ｑはいっそう得意になって、さらにこれらの観衆たちを満足させようと、再び力いっぱいつねってから、ようやく手を放した。[22]

ここで、ヒゲの王の代わりに、「酒屋の客」は傍観者として、阿Ｑとともに小丑の役柄を担っている。阿Ｑは若い尼さんをからかうなかで、傍観者たちを満足させるという行動で、一時的な満足感を得るようになった。このシーンでは、阿Ｑが主役で、傍観者たちが脇役である。両者の協力によって、舞台上の小丑の役を演じている。一方で、現実社会では、両者は「小醜」の醜態を余すところなく呈している。阿Ｑにとっては、屈辱感と敗北感を解消するため、自分よりもっと弱い者をいじめて、満足感を得たことであるが、これは一種の精神上の勝利にすぎない。傍観者たちにとっては、いじめられた弱小者が見世物の材料にすぎない。

しかし、他の場面では、小丑の役を担う人物の身分は変わる。例えば、ヒゲの王に喧嘩を売って殴られた場合や、「にせ毛唐」にステッキで殴られた場合では、阿Ｑは弱小者で、ヒゲの王と「にせ毛唐」はある満足感を得た「阿Q」のようであった。また、革命党の首切りを見た阿Ｑは一人の傍観者となった。言い換えれば、「阿Q＝傍観者＝弱小者」という等式が成立するということである。つまり、誰もが阿Ｑ・傍観者・弱小者になる可能性があるということ、小丑の役を演じる可能性があるということは魯迅が提示しているのではないだろうか。そのような身分の変化によって、どのように小丑の役を演じていくのかについて、阿Ｑが処刑場に連れて行かれた場面を見ていく。

この車はただちに動き始め、前では兵士と自警団員の一隊が鉄砲を背負っており、両脇では大勢の見物人が口を開けており、後ろはどうかと言えば、阿Ｑには見えなかった。それでも彼はハッと気づいた――これは首切りに行くんじゃないのか？（中略）しかし、彼は完全に気を失うことはなく、焦るいっぽう、平然としており、彼の意識の内では人はこの世に生まれたからには、もとよりときには首を切られることもあるだろう、という気がしていた。

彼はさらに道まで知っていたので、ふしぎに思った――処刑場の方向とは違うのはなぜなん

だ？これが見せしめのための引き回しであることを、彼はわかっていなかったのだ。もっともわかっていても同じことで、彼はただ人はこの世に生まれたからには、もとよりときには見せしめのため引き回されることもあるだろう、と思うだけなのだ。[23]

この場合では、阿Ｑは完全に弱小者となり、反抗もせず、最大限に協力する姿勢で、小丑の役を演じおり、「沈黙した国民」としての「小醜」みたいな愚かさを呈している。これはからかわれた後、「罰当たり、子孫が絶える阿Q」[24]と叫んだ若い尼さんとは対照的だ。阿Ｑは「首切りに行く」こと、「見せしめのため引き回される」ことをある種の合理的な存在にして、精神勝利法の以外、精神上・心理上の慰藉・自慰を求めていた。このような阿Ｑは「沈黙した国民」の代表者であり、その「魂」が「奴隷根性」しかないだろう。また、これは「哀其不幸、怒其不争」[25]という魯迅の批判的な筆鋒とも合致する。

一方で、阿Ｑは傍観者とともに、演劇の小丑を演じており、民衆の無知蒙昧を十分に表している。阿Ｑは「口を開けて」何を求めるような彼の見せしめを見物する傍観者を満足させるため、「二十年経てば再び男一匹」という月並みのスローガンを言い出して、「いいぞ！」[26]と傍観者の喝采を博した。このように互いに調子を合わせて唱和するシーンは演劇の中でよく見られるが、側面から民衆の愚昧と無知を反映している。しかし、彼らは「他人の肉体的苦痛が感じられぬように」、さらに「他人の精神的苦痛をも感じなく」[27]なったため、自分自身がいつか次の「阿Q」になれることに気付かないのである。

したがって、阿Ｑの死後、未荘の人々は銃刑された阿Ｑが当然悪いと言い、平気でいられる心理を持ち、自らが銃刑された阿Ｑの一族に属することを自覚していない。城内の人々はさらに不満を持っており、「銃殺は首切りほどおもしろくないし」「芝居の文句も唸れなかった、ついて回ってくたびれもうけだ」[28]と思い、次の首切りの「阿Q」や芝居の文句を唸る「阿Q」を待つしかないできないだろう。このような阿 Q と傍観者は「まるで岩にひしがれた草のように、黙々と生き、そして黄ばみ、枯れてゆくばかり」と魯迅が語っているように、阿Ｑと傍観者に象徴される中国人が代々、演劇の小丑のように歴史の舞台で身分を変えながら登場したりしている。このような「奴隷根性」への批判においては、莫言が恐らく魯迅に大いに及ばない。莫言は『白檀の刑』において、どのような批判を展開したかについて、後文で検討する。

3.2 統治者に操られる殺人の人形としての首切り役人

莫言は『白檀の刑』の創作動機について、以下のように語っている。

なぜ『白檀の刑』を書いたのか？講談師という身分を復活したかったことと、他に魯迅に学びたかったからなのです。私は少年時代に魯迅の「薬」「阿Ｑ正伝」を読みまして、魯迅がそ

のような観衆を大変憎んでいることを知りました。魯迅の最大の発見とはこのような観衆心理です。しかし魯迅は首切り役人の心理は描いていないと思うのです。（中略）現在に至るまで、このような心理はなおも存在しております。「文革」期にはしばしば人民裁判大会、大衆大会が開催されまして、私も参加しました。私たちは取り囲んで見ており、当局側の目的は一殺百戒、庶民に罪を犯さぬように警告することなのですが、庶民はこれを芝居替わりに見ているのです。魯迅の小説にはこのような描写が多いのですが、観客と受刑者を描くだけでは、このお芝居は不完全なのでして、三つうちの一つを欠いておりますので、私は『白檀の刑』の中で首切り役人のイメージを創り出したのです。[29]

ここでは、莫言は魯迅文学に関する読書経験を通して、魯迅が描いた観衆心理をうまく理解して、自ら魯迅の影響を受けたことを述べている。また、莫言にとっては、傍観者、受刑者、首切り役人が三位一体となる。処刑場が芝居の舞台のように、その三者が共に演じるため、莫言は魯迅の観衆心理を発展し、首切り役人の心理を描く趙甲のイメージを創り出した。『白檀の刑』の中で、咸豊帝（1831－1861、清の第九代の皇帝。筆者注）に見せる宦官の小虫子を処刑する芝居について、以下のように述べている。

陛下が刑罰の選択にこれほど心を労されておるのは、ひとえに小虫子をひどい目に遭わせ、宦官めらに小虫子の惨めな最後を見せつけることで、一罰百戒の効果をねらっておいでなのじゃ。（中略）本官の命令じゃ。執行時間を引き延ばせ。少なくとも一時（いっとき）は引き延ばして、芝居よりも面白くするのじゃ。［吉田富夫訳］[30]

処刑の芝居ではこのように、皇帝の意を満足させるのが一番重要なのである。小説の中で、咸豊帝の七つ星の猟銃を盗んだ宦官の小虫子を酷く刑罰する命令を受けた後、師匠の余姥姥[31]は「閻魔の門」という酷刑の道具を造り、刑執行の前、「閻魔の門」を試してみた。また、ほかの宦官らを戒める「一罰百戒」という狙いがあるため、宦官らは咸豊帝とともに傍観者となった。そして、「閻魔の門」の演練は舞台に登場する前に、芝居の練習や試演とは一致しており、良好な演出効果を目的にする。趙甲と余姥姥は小虫子を処刑した後、「さすが刑部の処刑人は仕事が堂に入っておる！めりはりが利いて緩急所を得て、朕は芝居を堪能したぞ」[32]という咸豊帝の好評を博しており、「芝居より面白くする」という目的を達したと言えよう。一方で、処刑人の仕事を「一つの芸」とする趙甲は自分の両手を大切にし、この両手で処刑する正当性、処刑人の心理を息子の小甲、嫁の眉娘に語っている。

嫁女よ。泣こうが、恨もうが、どうにもならぬ。西太后さまの大恩を受けたわしとしては、朝廷に尻を向けるようなマネはできぬのじゃ。わしがおまえのお父を殺さなくとも、ほかの誰

かが殺すであろう。生半可な二流のやからに殺されるより、わしに殺されるほうがましというもの。（中略）

息子よ。（中略）処刑人の仕事も一つの芸だとな。この芸は、立派な男はやらぬが、ぼんくら男には出来ぬぞよ。この仕事は、朝廷の精気の現れなのじゃ。これが盛んなら、朝廷も盛んじゃし、これがさびれるときは、朝廷の気脈も尽きるのじゃ。[33]

「西太后さまの大恩を受けた」趙甲にとって、朝廷が処刑の命令を下した受刑者を処刑するのは当たり前である。これは趙甲の仕事であるが、朝廷に、あるいは西太后に忠心を表すことでもある。しかし、趙甲は朝廷の法律や西太后の権威を代表して刑を執行するのではなく、受刑者たちが当然悪いという心理を以て執行している。一方で、趙甲は自分の仕事が「朝廷の精気の現れ」だと考え、朝廷の体面を保とうと、処刑人の良い姿勢、処刑の正当性を説明している。最後に、処刑人の仕事は絶対誰かがしなければならないので、「わしもかねての腕を存分に振るって、のちのちも歴史に残るよう、堂々たる死に様をさせてやろうわい」というように、趙甲は自分の腕前に自信を持っており、心安らかに行っている。「朕は芝居を堪能したぞ」という咸豊帝の言葉から、処刑が統治者の要望に応じて行うため、趙甲におけるこのような心理の形成と維持は政治権力の認可によって、実現したのである。趙甲は一種の殺人の合理性・合法性を獲得したと言えよう。

趙甲は統治者に操られる殺人のための人形にすぎない。『白檀の刑』の中で、趙甲と余姥姥らは「首切り」「腰斬刑」「凌遅刑」「閻魔の門」「白檀の刑」という五つの刑罰を行い、受刑者の肉体上の苦痛を通して、権力者の病的な精神を満足させた。また酷刑の執行には民衆への見せしめとして「一罰百戒」という統治者の目的がある。『白檀の刑』において、酷刑を傍観する数多くの民衆は無頓着さ、無関心さ、無感動さをそれほど表さず、低俗な趣味や病的な心理を満足させるだけで、獣性の一面を呈している。

なぜこのような趙甲の人物像を作り上げたのかについて、莫言は現代中国における張志新（1930－1975）と林昭[34]（1932－1968）の事件に言及しながら、以下のように語っている。

八十年代初頭に、張志新のことが公開されたとき、私は大きなショックを受けました。そのとき私はこう考えたのです―命令により死刑執行前に張志新の喉を切断した人たち、革命の名により、人民の名により張志新に極刑を加えた人たち、彼らは当時どのように考えたのだろうか。（中略）その後、九十年代に入ると、私たちは北京大学の才媛林昭の物語を知り、林昭物語の中の銃弾代金五銭という細部を知るのです。私は再び同じ問題を考えました。当時林昭を残酷に痛めつけた人たち、林昭の口に押し込んで、彼女が叫ぶたびに膨張するボールを発明した人たちは、いったい何を考えていたのか。（中略）さらに一歩進んで考えた結果に私が驚いたのは、ある意味において、あるいはある特殊な状況下では、私たちほとんどの人が、首切り

役人となるか、鋭い表情の観客になるだろう、と思われるのです。ほとんどすべての人の魂奥深くに、首切り役人趙甲が隠れているのです。[35]

張志新と林昭の両氏を処刑した人たちは趙甲とは同じく、法律の正義を維持するために人を殺したのではなく、「統治者」のために、あるいは「最高指導者」のために人を殺したのである。彼らが「革命の名」「人民の名」のもとに、死刑執行の執行権を取得し、殺人の合理性・合法性を獲得したことは趙甲とはほぼ同じであろう。張志新の名誉回復と林昭の無罪判決に対して、かつての死刑執行人はおそらく、自分の罪を意識せず、しかも罪への反省をもしないと思われる。なぜなら、現代中国において、上から下まで、その誤りと罪への認識・覚悟・反省・懺悔などを徹底していないからである。このような「特殊な状況」が再び発生するならば、張志新と林昭の事件は歴史の循環の一環にすぎないだろう。そして、莫言が指摘した「私たちほとんどの人が、首切り役人となるか、鋭い表情の観客になるだろう」「ほとんどすべての人の魂奥深くに、首切り役人趙甲が隠れている」ということは圧政下の現代中国における一般庶民の極めて暗黒な心理であり、私たちが厳しく自己反省しなければならないことを提示している。

莫言は首切り役人である趙甲の人物像を通して、現代中国人における「首切り役人の心理」を指摘し、その心理を生み出す現代中国の政治体制にも触れて批判を展開したと考えられる。これは、「ずっしりした銀貨の重み、それが私に安堵と喜びを与えてくれたとき、私はふと、別のことを思いついた。すなわち、われわれはきわめて容易に奴隷化されるし、奴隷化された後でも十分に満足していられる」[36]という、魯迅が発見した中国人の「奴隷化心理」に対して、莫言は一歩踏み込んで表現したのである。この部分に関しては、両作家の文学創作の動機[37]を検討する必要がある。

4. 魯迅の「民衆のために」と莫言の「民衆として」

周知のように、魯迅は医学の志を捨てて文学の道を辿っていった。魯迅は「吶喊自序」の中で、以下のように述べている。

私の夢は美しかった――卒業して帰ったら、父のように誤診されている病人の苦しみを救い、戦争のときには軍医になろう、そして国民の維新に対する信仰を広めよう。（中略）あるとき、私はついに画面で久しぶりに多くの中国人と面会することになった――一人が中央で縛られ、大勢が周りに立ち、どれも屈強な体格であるが、鈍い表情をしている。解説によれば、縛られる男はロシアのために軍事スパイを働き、日本軍によって見せしめのため首を切られようとしており、周りのはこの盛大なる見せしめを見物しようとやって来た人々だという。

（前略）およそ愚弱な国民は、たとえ体格がいかに健全だろうか、なんの意味もない見せしめの材料かその観客にしかなれないのであり、どれほど病死しようが必ずしも不幸と考えなくともよい、と思ったからである。それならば私たちの最初の課題は、彼らの精神を変革することであり、精神の変革を得意とするものといえば、当時の私はもちろん文芸を推すべきだと考え、こうして文芸運動を提唱したくなったのだ。[38]

当初は医学の道を志した魯迅は、「父のように誤診された病人の苦しみを救う」こと、「戦争のときには軍医になる」こと、「国民の維新に対する信仰を広める」ことという美しい夢を抱き、「救国救民」という理想を持っていた。ここには既に、後に医学の道を捨て文学の道を志し「民衆のために」、「私たちの最初の課題は、彼らの精神を変革すること」と明言し、国民性の改造を目指した魯迅の姿勢が窺える。しかし、莫言が作家になることを選んだのは魯迅とは非常に異なる動機による。莫言は「私はなぜ書くのか」の中で、魯迅に言及しながら、以下のように述べている。

そのようなわけで私がなぜ書くのかと言えば、最大の理由は最初は毎日三食餃子を食べる幸せな暮らしを送るために書こうと思ったということなのです。これは魯迅の中国人の麻痺した魂を救うためと比べると、その差はなんと大きいことでしょうか。魯迅は私のような低俗な発想をしたことはないでしょう。[39]

衣食が満ち足りていなかったため、作家になれば原稿料で「毎日三食餃子を食べる幸せな暮らしを送る」ことが出来ると考えた、という莫言の文学創作の動機は当時の中国社会の現状に深くつながっている。莫言は「庶民として書く」[40]（2001）の中で、以下のように述べている。

ある意味で、「庶民のために書く」とはインテリの書き方です。これには長い伝統があります。魯迅たちから始まりまして、書いていたのは故郷のことですが、その見方はインテリ目線です。魯迅は啓蒙者であり、その後は啓蒙者を演じる人はどんどん増えております。（中略）いわゆる庶民的執筆とは自らのインテリの立場を捨て去り、庶民の考え方で考えることなのです。［藤井省三・林敏潔訳］[41]

莫言は「庶民的執筆」という立場から、魯迅の「民衆のために」書くという知識人の立場とは区別して、自分の文学創作を「民衆として書く」と位置づけている。しかし、これは莫言がへりくだっているのではなく、彼がそもそも魯迅とは異なり農民の出身で、庶民であるからだ。さらに、ここで彼が自分を「民衆」の一人としているのは、現代中国において、民衆を啓蒙する、あるいは民衆を教育するのは党の終始一貫した政策であるため、莫言らの現代中国作家は

その被教育者でもあるという意味を含んでいる。

5. おわりに

以上のように、本論は「狂人日記」と『酒国』との、「阿Q正伝」と『白檀の刑』との比較研究を通し、莫言文学における魯迅の批判精神の継承・発展を検討した上で、社会批判・政治批判に着目して首切り役人の心理を分析した。結論として、次のようにまとめておく。

まずは、魯迅と莫言は「吃人」の主題に対する批判の対象がそれぞれ異なるが、「吃人」の主題に基づく批判の展開が一致しており、両者とも過去・現在・未来という三つの時空から「吃人」の伝統性、現実性、将来性を提示している。魯迅は中国の伝統文化・思想に対する「吃人」をめぐって批判を展開している。それに対して、莫言は現代中国の現状、実情に基づき、魯迅が提起した「吃人」の主題を引継ぎ、官僚の腐敗、社会の暗黒面を批判して、社会改良・社会改革を求めている。彼は、それを徹底しなければ、現代中国における「吃人」の伝統と現実が不可視化されるだけでなく、「吃人」が将来も発生するだろうと示唆している。

次に、「阿Q正伝」では、阿Qは傍観者であるとともに演劇の小丑を演じており、民衆の無知蒙昧さを十分に表している。また、阿Qが傍観者や、弱小者の身分を変えたり変えられたりして、「阿Q＝傍観者＝弱小者」という等式が成立するということによって、誰もが阿Q・傍観者・弱小者になる可能性があると魯迅は提示している。阿Qは「沈黙した国民」の代表者として、その身の「奴隷根性」を表している。『白檀の刑』において、統治者に操られる首切り役人・趙甲は残酷な死刑を執行することによって、「一罰百戒」という目的とする統治者の病的な心理を満足させる一方、死刑執行の合理性・合法性によって平静を保っていられる。さらに、莫言は圧政下の現代中国に合わせて、魯迅が発見した「奴隷化心理」の中から、現代中国人の心の奥に隠している「首切り役人の心理」を指摘した。

最後に、啓蒙者である魯迅に対して、魯迅文学を愛読し、魯迅に私淑する莫言は文学上において、被啓蒙者であり、魯迅が「民衆のために」創作していたのとは異なり、「民衆として」創作する姿勢にしている。文学の批判精神からみると、魯迅は「文芸運動を提唱」することによって、国民性批判、社会批判を行い、社会改造を求める。それに対し莫言はせめて「毎日三食餃子を食べる」という基本的な生活を維持することを前提にして、その文学で社会批判・政治批判を行い、社会改良・社会改革を求めたのである。

（本論文は筆者の博士学位論文「莫言文学における文学の批判性の成立」（2022 年 5 月、名古屋大学）の未発表部分を投稿論文として整理し直したものである。）

注

[1] 林敏潔「莫言とその文学――あとがき」、『莫言の思想と文学―世界と語る講演集』、藤井省三・林敏潔訳、東方書店、2015 年、235－236 頁。
[2] 藤井省三「東アジアのミステリー／メタミステリーの系譜―松本清張『眼の差』と莫言『酒国』および魯迅「狂人日記」」、『魯迅と世界文学』、藤井省三、東方書店、2020 年、20 頁。
[3] 張閎「感官的王国――莫言筆下的経験形態及功能」、『当代作家評論』、2000 年第 5 期、85 頁。中国語原文:莫言継承了五四新文学的批判性的伝統，併賦与它新的特徴。如果説“吃人”主題在魯迅那里是一個関于民族伝統文化的批判性的主題的話，那麽，在莫言筆下則主要是一個関于人性和現実政治性的批判性的主題。
[4] 羅興萍「試論莫言『酒国』対魯迅精神的継承――魯迅伝統在 1990 年代研究系列之一」、『安徽師範大学学報』（人文社会科学版）第 30 巻第 6 期、2002 年、666 頁。中国語原文:莫言対魯迅批判国民性的思想的継承，也是対魯迅的“吃人”主題的継承。作者用這種感性的文字，揭露了食人者的残酷本性，也批判国民的愚弱，幾乎成為魯迅這一文学意象的現代版。
[5] 張磊「百年苦旅:“吃人”意象的精神對應――魯迅「狂人日記」和莫言『酒国』之比較」、『魯迅研究月刊』、2002 年第 5 期、56 頁。中国語原文:前者尋求的是“国民性”的改造，以期建立健全国民性格;後者則是注重社会政治現実的転変，以期建立健全合理的社会体制。前者着眼于人，後者着眼于社会。前者追尋的是人的現代化，後者重視的是社会的現代化。
[6] 魯迅「狂人日記」、『故郷／阿Q正伝』、藤井省三訳、光文社、2009 年、275 頁。（本稿では、「狂人日記」の中国語原文は魯迅『魯迅全集』第一巻（人民文学出版社、1981 年）を参照した。以下同様。）
[7] 莫言『酒国――特捜検事丁鈎児の冒険』、藤井省三訳、岩波書店、2012 年、47 頁。（本稿では、『酒国』の中国語原文は莫言『酒国』（作家出版社、2012 年）を参照した。以下同様。）
[8] 張旭東「莫言『酒国』を読む――中国の「いま」を描くデモ―ニック・リアリズム」、杉谷幸太訳、愛知大学現代中国学会編『中国 21　Vol. 39』、東方書店、2014 年、114 頁。
[9] 魯迅「狂人日記」、前掲、281 頁。
[10] 魯迅「狂人日記」、前掲、288 頁。
[11] 魯迅「狂人日記」、前掲、290 頁。
[12] 文化と文明は違う概念である。本稿では、この二つの概念を詳しく説明せず、区別しないが、魯迅文学における中国の伝統文化への批判と中国固有の文明への批判とを同一視する。
[13] 魯迅「灯下漫筆」、『魯迅文集　第三巻』、竹内好訳、筑摩書房、1977 年、154－155 頁。（本稿では、「灯下漫筆」の中国語原文は魯迅『魯迅全集』第一巻（人民文学出版社、1981 年）を参照した。以下同様。）
[14] 魯迅「狂人日記」、前掲、270 頁。
[15] 莫言『酒国――特捜検事丁鈎児の冒険』、前掲、80 頁、129 頁。
[16] 莫言「私の文学経験」、『莫言の文学とその精神――中国と語る講演集』、藤井省三・林敏潔訳、東方書店、2016 年、294－295 頁。
[17] 莫言『酒国――特捜検事丁鈎児の冒険』、前掲、268 頁。
[18] 魯迅「ロシア語訳『阿Q正伝』序および著者自序略伝」、『魯迅文集　第三巻』、竹内好訳、筑摩書房、1977 年、164 頁。
[19] 大野陽介「キャラとしての阿Q――「風波」「阿Q正伝」を読む」、『立命館文学第 67 号　宇野木洋教授退職記念論集』、立命館大学人文学会、2020 年、1581 頁、1584 頁。
[20] 魯迅「阿Q正伝」、『故郷／阿Q正伝』、藤井省三訳、光文社、2009 年、87－88 頁。（本稿では、「阿Q正伝」の中国語原文は魯迅『魯迅全集』第一巻（人民文学出版社、1981 年）を参照した。

以下同様。）
[21] 魯迅「阿Q正伝」、前掲、85 頁。
[22] 魯迅「阿Q正伝」、前掲、92－93 頁。
[23] 魯迅「阿Q正伝」、前掲、144－145 頁。
[24] 魯迅「阿Q正伝」、前掲、93 頁。
[25] 魯迅の「摩羅詩力説」(1907)。これは魯迅がイギリス詩人のバイロン（1788－1824）を評論する用語であり、イギリス人を覚醒させようとするというバイロンの態度を示している。また、これが阿Q、孔乙己、祥林嫂などの人物に対する魯迅の態度ともするのは一般的である。原文:（バイロン）重独立而愛自由，苟奴隷立其前，必衷悲而疾視，衷悲所以哀其不幸，疾視所以怒其不争。（魯迅『魯迅全集』第一巻、人民文学出版社、1981 年、80 頁。）
[26] 魯迅「阿Q正伝」、前掲、146 頁。
[27] 魯迅「ロシア語訳『阿Q正伝』序および著者自序略伝」、前掲、163－164 頁。
[28] 魯迅「阿Q正伝」、前掲、148 頁。
[29] 莫言「私はなぜ書くのか」、『莫言の文学とその精神――中国と語る講演集』、藤井省三・林敏潔訳、東方書店、2016 年、363－364 頁。
[30] 莫言『白檀の刑』（下）、吉田富夫訳、中央公論新社、2010 年、76 頁。（本稿では、『白檀の刑』の中国語原文は莫言『檀香刑』（作家出版社、2012 年）を参照した。以下同様。）
[31] 『白檀の刑』に登場する、趙甲の師匠である。小説においては、首切り役人の中で、一番年上で経歴が長く、一番腕の立つものが「姥姥」と称される。
[32] 莫言『白檀の刑』（下）、前掲、96 頁。
[33] 莫言『白檀の刑』（下）、前掲、98－99 頁。
[34] 張志新は文革中に毛沢東への個人崇拝を批判したため、反革命として逮捕されて、1975 年 4 月 4 日に処刑された。1979 年、名誉回復され革命烈士に追認された。林昭は北京大学の学生で、熱烈な毛沢東の支持者であったが、「反右派闘争」に疑問を抱いたことで逮捕され、1968 年 4 月 29 日に銃殺刑に処されたが、1981 年に無罪判決が出されている。
[35] 莫言「中国小説の伝統――私の長篇小説三作から語り始める」、『莫言の文学とその精神――中国と語る講演集』、藤井省三・林敏潔訳、東方書店、2016 年、140－141 頁。
[36] 魯迅「灯下漫筆」、前掲、147 頁。
[37] 嶋田聡は小説の語りの特質をめぐって、「魯迅「阿Q正伝」の語りは「民衆の中へ」という指向性をもつもの」（前掲論文（1）、19-20 頁）と指摘したが、魯迅と莫言を比較して検討した結果としては莫言の「庶民（民衆）としてという創作は「魯迅文学が打ち立ててきた「民衆の中へ」という方法論をさらに一歩前進させる」（前掲論文（2）、22 頁）と結論付けている。筆者は小説の語りの特質や小説創作の方法論に触れず、嶋田氏の論文とその結論から受けた示唆により、両作家の文学創作の動機を考察する。
[38] 魯迅「吶喊自序」、『故郷／阿Q正伝』、藤井省三訳、光文社、2009 年、253－254 頁。（本稿では、「吶喊自序」の中国語原文は魯迅『魯迅全集』第一巻（人民文学出版社、1981 年）を参照した。）
[39] 莫言「私はなぜ書くのか」、前掲、334 頁。
[40] 原題は「作為老百姓写作」。中国語「老百姓」の訳語としては、「民衆」、「庶民」、また引用文「吶喊自序」の中の「国民」という語意のニュアンスが少し違う言葉が当てられ得る。「庶民」は、名もない金もないが、健全な生活を営む一般の人々という意味を含んで多く使われる。「民衆」は、多く、被支配者階級としての世間一般の人々を指す。現代中国（1912 年以降の中国、特に 1949 年以降の中国をさす。筆者注）のイデオロギーなどを考えた上で、本稿は中国語「老百姓」を「民衆」という訳語に統一している。
[41] 莫言「庶民として書く」、『莫言の文学とその精神――中国と語る講演集』、藤井省三・林敏潔訳、東方書店、2016 年、43 頁。